

## 「無」に意味付けする存在とは何か？

—J・P・サルトル『自我の超越』から『存在と無』への課題—

馬 淵 富 康

### 1. 『自我の超越』において初めて打ち立てられた「絶対的意識」の態度

大部分の哲学者たちにとって、自我 (Ego) は意識の一《住人》である。ある人々は、自我を、《体験》 (Erlebnisse) のただ中においてそれを統一する空虚な原理として形式的に現存するものと主張する。他の人々—大部分は心理学者たちである—は、自我を、私たちの心的生活の各契機の中において欲望や行為の中心として実質的に現存するものと考えている。私たちがここで示したいことは、自我は形式的にも実質的にも意識の中にあるのではないということ、すなわち、自我は外部、つまり世界の中にあり、他者の自我と同様、世界の一存在者であるということ、これである<sup>1)</sup>。

J・P・サルトルは1905年6月21日にパリで生まれた。冒頭に引用した『自我の超越』は1934年頃から断続的に書かれ、1936年に哲学雑誌《*Les recherches philosophiques*》に発表された<sup>2)</sup>。当時、30歳を越えたばかりのサルトルは、私生活においても劇的な変化の中に生きていた。1929年にシモーヌ・ド・ボーヴォワールと2年間の契約結婚を初めて結び、同じ年に兵役にも就く。1931年に兵役を終えると、北フランスの港町ル・アーヴルに高等中学の哲学教師として赴任する。1933年にはベルリンに留学し、そこで1年間、フッサールやハイデッガーの哲学を精力的に学ぶ。帰国後は再びル・アーヴルへと帰り、高等中学の教師を続けながら、哲学的思索を続けたようである<sup>3)</sup>。

さて、我々がこの論文の冒頭に引用した『自我の超越』は、サルトルの思想的変遷をたどる出発点として、極めて重要なものである。サルトルは同時期に『想像力』(1936年)や『想像力の問題』(1940年)と題される哲学論文を発表

しているが、サルトルの思想的変遷を省察するために我々が最初に取り上げる哲学論文は『自我の超越』である。というのも、『自我の超越』こそ、これから我々が省察していくであろうサルトル哲学の最も根源的かつ源泉的な主題を提示しているように思われるからである。我々は、サルトルの全哲学的基礎を『自我の超越』の中に見る。それを如実に物語っているのが、『自我の超越』の最後の箇所である。

世界が自我 (Moi) を創造したのでもなければ、自我が世界を創造したのでもなく、それらは絶対的・非人称的な2つの対象であり、意識を介してのみ、それらは結び合うのである。この絶対的意識は、それが私 (Je) から純化されている時、もはや主体を何も持たないし、それはまた、諸表象の集合でもない。絶対的意識は、ただ単に、実存 (existence) の第一条件であり、実存の絶対的根源なのである<sup>(4)</sup>。

サルトルはここで「絶対的意識」に「実存の第一条件」を与え、「絶対的意識」を「実存の絶対的根源」として規定してきた。不明瞭な自我に絶大な権限を与えるのではなく、明瞭かつ明晰な「絶対的意識」から人間の実存を物語ることによって、デカルト以来続く自我の優位性、すなわち、哲学の根本原理としての自我を退けたのである。『自我の超越』において打ち立てられた「絶対的意識」の明瞭性は、まさにこの『自我の超越』において、初めて打ち立てられた概念である。「絶対的意識」の明瞭性を打ち立てることによって、サルトルは自己の哲学の絶対的な基礎をそこに置き、そこから出発することによって、自己の哲学の根本原理を見出した。「絶対的意識」を明確に打ち出した『自我の超越』における最後の一文は、これから始まるサルトルの全哲学の方向性を示唆しているように思われる。「絶対的に実証的な道徳と政治とを哲学的に基礎付けるためには、もはや、これ以上のことは必要ないのである<sup>(5)</sup>」。我々の研究は、絶対的に実証的な「道徳」と「政治」とを哲学的に基礎付けるための絶対的基盤として、サルトルが『自我の超越』で初めて打ち立てた「絶対的意識」を省察することから始めようと思う。

## 2. フッサール現象学における「超越論的自我」

### (l'ego transcendantal) 批判の全容

サルトルが「絶対的意識」を確立するために依拠したのは、フッサールの現象学である。「意識は常に何ものかについての意識である」という現象学の根本命題から出発するフッサールの現象学的態度は、サルトルの問題関心とも必然的に調和した。フッサールによると、現実の対象そのものはエポケーによって判断を中止されるが、その対象を志向する意識の志向性と、その意識が志向する志向的对象との関係を記述することは可能であるという。このフッサールの現象学的方法に、サルトルも基本的には従っている。しかし、サルトルがフッサールを批判する最大の論点は、「超越論的意識 (la conscience transcendantale)」についての扱い方である。「経験的意識の中に閉じ込めりながら、世界を構成する超越論的意識<sup>69)</sup>」についてのフッサールの記述には満足しているサルトルも、「絶対的意識の構造としての超越論的我 (Je transcendantal)<sup>70)</sup>」を唱えるフッサールの立場には疑問を呈するのである。フッサールの立場は、「超越論的我」を人間の意識の背後に認め、その意識の必然的な構造をなしているものと考えた立場である。したがって、「超越論的意識は、厳密に人称的なものとなる<sup>71)</sup>」のである。これに対して、サルトルの立場は明確である。サルトルの立場においては、フッサールの言うような、無造作にそのまま措定された抽象的な「超越論的我」というものなどは存在せず、「超越論的領域は非人称的 (impersonnel), あるいは、こう言った方がよければ、《前人称的》 (prépersonnel) となり、その領域に我はいない<sup>72)</sup>」のである。サルトルによると、突然、何処からともなく生じた「超越論的我」なるものに存在根拠はなく、不明瞭かつ不明確なこの「我」は、明瞭かつ明晰な「意識」を闇の中へと葬り去る。意識の絶対的な明瞭性から出発したいサルトルにとって、フッサールが無条件に前提とした「超越論的我」には満足できなかったのである。「意識の現象学的概念は、我 (le Je) の統一かつ個性的な役割を完全に無用なものとする。反対に、意識の方が、私の我 (mon Je) の統一と人称性とを可能にするのである<sup>73)</sup>」。サルトルはさらに批判を続ける。「超越論的我は存在理由を持たない<sup>74)</sup>」、「この不必要な我は、有害でさえあるのだ<sup>75)</sup>」、「超越論的我、それは意識の死である<sup>76)</sup>」等々。サルトルがここで繰り返す意識とは、「第一次的あるいは非反省的意識

(conscience du premier degré ou *irréfléchie*)<sup>90</sup>」である。こうした意識の中には、「我」のための場所などは存在しない。そこにあるのは、ただ「絶対的意識」のみであり、それはまさに「純粹意識」そのものである。

純粹意識が1つの絶対であるのは、もっぱら純粹意識が意識そのものの意識であるという理由からにすぎない。したがって、純粹意識は《ある》(être)と《現れる》(apparaître)とが1つのことにすぎないという極めて特殊な意味において、1つの《現象》(phénomène)にとどまるのである。純粹意識は全くの軽快さ、全くの透明さである。この点において、フッサールのコギト(Cogito)はデカルト的コギトと極めて異なる。しかし、もし我(le Je)が意識の必然的な構造であるならば、この不透明な我は、同時に、絶対者の地位にまで押し上げられることになる。したがって、私たちはここで1つのモノアド(monade)に面することになるのである。そして、このことこそ、不幸にも、フッサールが取った新しい思想の方向性でもあった(『デカルト的省察』を参照せよ)<sup>91</sup>。

サルトルの批判は、フッサールが1つの純粹な絶対的意識から出発しながら、超越論的領域において「超越論的我」を意識の必然的な構造として安易に措定し、その「我」を絶対者のごときものとして想定したことに向けられていた。サルトルに言わせれば、こうしたフッサールの新しい思想の展開は、これまでにフッサール自身が意識に与えてきた定義と両立し得るものではない。むしろそれは、全く軽快な意識を重たいものにし、全く透明な意識を不透明なものへと墮落させるのである。「もし我(le Je)が世界と同じ資格における相対的な一存在者、すなわち、意識に対する一対象でなくなるならば、現象学のすべての成果は崩壊に瀕するのである<sup>92</sup>」。このことが、純粹意識を死へと追いやり、純粹意識の明瞭さを奪う契機となるのである。

### 3. 非反省的意識の中に「私」は存在せず、反省的意識の中に

#### こそ「私」は存在する

フッサールが新しく取り入れた「超越論的我」の現象学を徹底的に批判した

サルトルは、デカルト以来続く「我思う、ゆえに我あり」のコギト命題をも退ける。サルトルによると、「コギトが人称的であるということを否定できない<sup>99</sup>」のは、「《我思う》の中には、思う我が存在する<sup>100</sup>」からであるが、「コギトを記述したどんな著述家も、コギトを反省作用として示し、すなわち、第二次的作用として示したということをおもひ起こす必要がある<sup>101</sup>」のだという。ここでサルトルは、「反省作用」ないしは「第二次的作用」という概念を導入してきた。こうした概念を導入して、サルトルは何を言わんとしているのであろうか。まさにここにこそ、サルトルのデカルト的コギト批判を解く鍵があるように思われる。

たとえば、私が昨日、電車の中で見た景色を思い出そうとする時、私はその景色そのものを思い出すこともできるが、同時に、私がその景色を見ていたのだということをおもひ出すこともできる。この場合、私の反省作用は、私がその景色を見ていたのだという私の意識を対象として取ることによって、つまり、「意識に向けられた意識<sup>102</sup>」を対象として取ることによって可能となる。すなわち、コギトには「反省する意識と反省される意識との不可分の統一（反省する意識は反省される意識がなければ存在することができないほどまでに）がある<sup>103</sup>」のである。ところで、こういったコギトに対しては、次のように言うこともできる。

私がコギトを実現している時、私の反省する意識は、反省する意識そのものを対象として取ってはいない。反省する意識が明確にするものは、反省される意識についてである。私の反省する意識が意識そのものの意識である限り、それは非措定的（*non-positionnelle*）な意識である。私の反省する意識が措定的となるのは、反省される意識をめざす場合においてのみである。反省される意識は、意識そのものとして、反省される以前には、自己の措定的な意識ではなかった。それゆえ、《我思う》を語る意識は、まさしく思う意識ではない。あるいは、こう言った方がよければ、《我思う》を語る意識がその定立作用によって措定するものは、彼の思惟ではないのである<sup>104</sup>。

では、反省する意識と反省される意識という2つの折り重なった意識には、

思う「我」が共通に含まれているというのであろうか。いや、むしろ、この思う「我」は、反省される意識においてのみ含まれているのではないだろうか。実際に、反省する意識は、意識そのものとしては非反省的であり、非措定的である。それが「我」を含むと語ることができるためには、反省する意識が新たに反省され、措定されなければならない。すなわち、反省作用が「我」を可能たらしめるのであり、反省作用こそがデカルト的コギトを措定するのである。「まさしく、反省作用こそが、《自我》(Moi)を反省された意識の中に生まれさせるのではないだろうか<sup>28)</sup>。「非反省的意識の中に我は存在しなかったのである<sup>29)</sup>」。

非反省的意識の中に「我」は存在しない。「我」は反省された意識を通じて与えられるのである。だとすると、反省する意識の「我」、反省される意識の「我」、さらにはフッサールが定立した第三の「我」(すなわち、超越論的意識の「我」)といった3つの「我」は、それぞれどう規定されればよいのであろうか。サルトルはこれら3つの「我」の問題について、次のように語っている。「私たちにとって、こうした問題は、もっぱら解決不可能である。というのは、もし反省する我と反省される我とが意識の現実的な要素であるならば、それら2つの我が確立する交流(communiqué)などということは認められないし、ましてや、それら2つの我が最終的には唯一の我に一体化するなどということは、なおさら認められないからである<sup>30)</sup>」。

よって我々は、「我」を以下のように結論づけることができる。「我」は1つの存在者であり、それは反省作用によってしか現れない。無条件に措定された根拠のない「コギト」は、我々の世界をあまりにも確言しすぎるが、そういった超越論的な「我」は現象学的還元(すなわち、エポケー)によって、完全に排除されなければならない。こうした「我」は、反省意識によって把握された1つの対象である。反省作用によって構成された1つの対象は、「我思う」の中に含まれている「我」ではなく、それは人間によって創造された1つの絶対者なのである。しかし、こうした「我」が現象学的還元の操作によって排除されるならば、そこに残るのは全くの透明性を備えた「絶対的意識」だけである。「実際、《我が唯一絶対として実存する》と定式化する代わりに、《絶対的意識が唯一絶対として実存する》と表現されなければならないし、そのことは明らかに自明の理なのである。実際、私の我は、意識にとって他の人々の我よりも

確実であるということはない。ただ親密なだけなのである<sup>(1)</sup>。

『自我の超越』において定立された「絶対的意識」の実存は、これから我々が省察していくであろうサルトル哲学の絶対的基盤である。この「絶対的意識」の立場から、サルトルの思想的変遷は始まる。では、次なる主題を我々は何処に見出せばよいのであろうか。それを我々は、サルトル自身の記述の中に見出すことができる。

私が路面電車を追い駆ける時、私が時刻を見る時、私が肖像画の鑑賞に没頭している時、我 (Je) は存在しない。追いつかなければならない路面電車等々についての意識と、その意識についての非措定的な意識とがあるばかりである。事実、その場合、私は対象の世界に没入しているのであり、対象が私の意識の統一を構成し、対象が価値と牽引性と反発性をもって現れるのであるが、私 (moi) の方はと言うと、私は消え失せ、私は無へと帰したのである。この地平において、私 (moi) のための場所はなく、しかもこのことは偶然から生じるのでもなければ、一時的な注意の欠如から生じるのでもなく、意識の構造そのものから生じることなのである。

何かある対象に没頭している時、そこに「私」は存在しない。「私」は消え失せ、「私」は無へと帰したのである。だが、この「私」は反省されることによって現れてくるから、今度は、この無であるところのものに意味が附されていくことになる。ここに新たな主題が提出されたように思う。すなわち、この“無に意味付けする存在とは何なのか？”ということである。我々はこの主題の解明を『存在と無』の省察に委ねようと思う。

- 
- (1) Jean-Paul Sartre, *La transcendance de l'ego*, Paris, Librairie Philosophique J.Vrin, 1981, p.13. 邦訳, J・P・サルトル, 『自我の超越』, 竹内芳郎訳, 人文書院, サルトル全集第23巻『哲学論文集』, 1964年, 177頁。
- (2) Ibid., Introduction (par Sylvie Le Bon ), p.7-9.
- (3) 竹内芳郎 鈴木道彦編集, 『サルトルの全体像—日本におけるサルトル論の展開—』, ペリかん社, 1966年, 17-21頁を参照。
- (4) Ibid., p.87. 前掲『自我の超越』, 242-243頁。なお, サルトルは『自我の超越』において, 「自我」

を示す言葉として、「je」と「Moi」と「Ego」の3つの言葉を使い分けている。我々の省察においては、それぞれを「我（場合によっては、私）」と「自我」と「自我」として訳すことにした。「Moi」を「自我」と訳したのは、フッサールの『デカルト的省察』の仏訳に対応させてのこと（たとえば、「moi qui vit ceci ou cela」は「あれやこれやを生きる自我」等々）である。これに対して、「Ego」を「エゴ」とそのまま訳すのではなく、「自我」と訳したのは、この論文のタイトル『*La transcendance de l'ego*』（『自我の超越』）に起因する。しかし、いずれの場合にせよ、これらの訳し分けには大した意味がないように思われる。というのも、ここでのサルトルの主張は、これらの「自我」（ないしは「我」や「私」）の区分が本質的なものではないということを論証するために展開されているからである。サルトルの主張は、明瞭な「絶対的意識」を打ち立てることによって、不明瞭な「自我」（ないしは「我」や「私」）を退けることにある。なお、これらの区別については、サルトル自身も「文法上のものとは言わないまでも、もっぱら機能上のものにすぎないように思われる」（詳しくは、Ibid., p.44. 同上 201頁を参照せよ）と言及している。参考までに、竹内芳郎氏による『自我の超越』の訳註を引用しておく。「この論文でサルトルは、自我のことをしめす言葉として「je」と「Moi」と「Ego」との三つの言葉をつかい分けしている…。中略。「本訳書では、それぞれ、《我れ》、《自我》、《エゴ》と三つに訳しわけておいたが、しかし、もともとこの論文の主旨は、これらの自我のあいだの区別が本質的なものではないことを論証するにある、ということをかんがえてみるならば、以上のような言葉のつかい分けに、ことさらこだわることは、むしろ避けるべきだとおもわれる。なお、本論文題名「*Transcendance de l'Ego*」における「Ego」だけは、題名としての性質上、例外的に《自我》という訳語の方を当てておいた」（同上 244頁、訳註1を参照）。

- (5) Ibid., p.87. 同上 247頁。
- (6) Ibid., p.18. 同上 181頁。
- (7) Ibid., p.19. 同上 181頁。
- (8) Ibid., p.20. 同上 183頁。
- (9) Ibid., p.19. 同上 182頁。
- (10) Ibid., p.23. 同上 185頁。
- (11) Ibid., p.23. 同上 185頁。
- (12) Ibid., p.23. 同上 185頁。
- (13) Ibid., p.23. 同上 185頁。
- (14) Ibid., p.24. 同上 185頁。
- (15) Ibid., p.25-26. 同上 186頁。
- (16) Ibid., p.26. 同上 187頁。
- (17) Ibid., p.26-27. 同上 187頁。
- (18) Ibid., p.27. 同上 187頁。
- (19) Ibid., p.27-28. 同上 188頁。
- (20) Ibid., p.28. 同上 188頁。
- (21) Ibid., p.28. 同上 188頁。
- (22) Ibid., p.28. 同上 188-189頁。
- (23) Ibid., p.29. 同上 189頁。
- (24) Ibid., p.31. 同上 190頁。
- (25) Ibid., p.39. 同上 194-195頁。
- (26) Ibid., p.85. 同上 241頁。
- (27) Ibid., p.32. 同上 192頁。